

論文

滞日ムスリムの児童生徒への最良の支援について

——日本語教育を中心に——

荻原 廣
三浦 智佐美

〔抄録〕

滞日ムスリムの児童生徒が日本でどのような学習状況にあり、またどういった学習レベルであるのかを知るために、モスク関係者、ムスリムの児童生徒、及びその親にインタビュー及びアンケート調査を行った。その結果、学習において、学習言語、特に漢字がわからないことが原因で、教科学習全般についていけない児童生徒やダブルリミテッドの児童生徒がいる可能性があるという実態が明らかになった。また、外国で子どもを育てるにあたって両親が複雑な心境にあることもわかった。そして、最後に、児童生徒へどういった学習支援が考えられるかを考察した。

キーワード 滞日ムスリム、児童生徒、学習支援、日本語教育、学習言語

はじめに

店田(2019)によると、2018年6月末現在の在留外国人ムスリム(イスラム教徒のこと。女性性は、ムスリマと呼ぶこともある)は、正規の滞在資格を有する外国人ムスリムが152,744人、不法残留者も含めると、157,484人と推計される。また、モスクについては、「イスラームのホームページ」⁽¹⁾に掲載されているモスクの数を見ると、28か所(2006)→76か所(2013)→103か所(2019)と、年を追うごとに確実に増加していることが分かる。そして、モスクが造られる地域についても、2006年までは、その多くが東京にあったが、現在では北海道から沖縄まで35都道府県にみられる。なお、ムスリムの多くは家族があり、関東地区では既に3世、4世と世代交代している人たちも少なくないと言われている。

一方で、荒牧(2017)には、19歳以下の外国籍者数について以下のように書かれている。

2015年12月末法務省の統計によると、19歳以下の外国籍者数は28万8749人で、総数223万2189人の12.9%となっている。19歳以下の上位10か国は、中国9万123人、(中略)インド

ネシア4516人であり、総数の順位とは違った様相を示している。これらの上位50か国を取り上げ、その国の総数に占める割合が2割以上のものを高い順に並べてみたものが下表である。

そして、その表を見ると、興味深いことがわかる。それは、上位10か国（無国籍は除く）のうち、国教がイスラム教の国、あるいは、ムスリムが国民の多くを占める国が6か国と多くを占めるのである。順に記すと、以下のようになる。なお（ ）は子どもが全体に占める率（%）である。

1位エジプト（31.5）、2位アフガニスタン（30.6）、4位パキスタン（26.8）、6位ウズベキスタン（24.3）、8位バングラデシュ（22.8）、10位シリア（20.8）

このように、滞日外国人ムスリムの中には多くの子どもが含まれていることがデータの上からわかる。では、現在、日本で暮らしているこの子どもたちには、どのような教育を受け、また日本の学校で学ぶ上で必要不可欠である日本語能力が十分に備わっているのだろうか。この点について、まずは日本語能力が不十分であろう児童生徒の実数を知るため、日本語指導が必要な子どもや、そもそも不就学で学校で勉強していない子どものデータを探った。

はじめに文部科学省（2020a）のデータによると、日本の公立小学校、中学校、高等学校、義務教育学校、中等教育学校及び特別支援学校における日本語指導が必要な児童生徒は40,755人に上ることがわかる。しかし、この調査結果には、日本語指導が必要な外国籍の児童生徒の母語別在籍状況が掲載されてはいるが、英語、韓国・朝鮮語、スペイン語、中国語、フィリピン語、ベトナム語、ポルトガル語以外は、その他となっており、ムスリムの多い国の母語はその他に含まれているため、日本語指導が必要なムスリムの児童生徒の正確な数はわからない。

次に文部科学省（2020b）のデータによると、学齢相当の外国人の子どもの住民基本台帳上の人数（調査基準日は原則として2019年5月1日）は123,830人だが、そのうち19,471人が不就学の可能性があり、出国・転居（予定を含む）まで含めると22,488人と報告されている。しかし、国別のデータも母語別のデータもないため、この22,488人のうちムスリムの児童生徒がどの程度いるのかはわからない。

そこで、本論文は、モスクの関係者へのインタビュー調査と、滞日ムスリムの小学1年生から中学3年生までの子どもとその親を対象としたアンケート調査をもとにして、滞日ムスリムの児童生徒に関する言語状況（特に日本語能力）、学校での学習状況、帰国状況等を、また、親に関しては、子どもの教育と日本での生活に関する考え方を、それぞれ明らかにし、日本語指導が必要なムスリムの児童生徒に対する適切な支援について考察するものである。

調査方法は、まず筆者（三浦）が、各モスクの関係者に、子ども・親・学校に関するインタ

ビューを行い、そこから子ども達の様子や親の教育観、学校の対応などを知る。また、更にアンケート調査を行い、より詳しく検証していく。今回は中部および関西の5か所のモスクで調査を行った。呼称は、匿名を厳守するため、モスクA・B・C・D・Eとする。インタビューの方法は、10の質問に関する会話をICレコーダーで録音した。

次に、子どものアンケートは筆者(三浦)が、各モスクへ行き、マドラサ⁽²⁾をお願いして行い、その場で回収した。親のアンケートについては、子どものアンケートを回収する際に子どもに預け、後日回収した。

第1章 先行研究

滞日ムスリムに関する研究は、数多くあるが、そのうち、児童・生徒・学生に関する研究というものは、それほど多くはない。

例えば、中野(2015)は、在留ムスリム留学生を7000人弱と推計し、在留ムスリム留学生の異文化適応に関する研究を行っているが、在留ムスリム留学生を対象を絞った研究というものは少ないと論文の中で述べている。また、在留外国人ムスリム児童・生徒に関しても研究は多くはないがある。服部(2007)は、インドネシア人ムスリム児童の宗教的価値形成と教育の現状を名古屋市の事例から考察している。一方、松井(2019)は、東広島市の小学校におけるムスリム児童に対する宗教的配慮への取り組みと学校生活について述べている。しかし、どの研究も、今回のテーマである日本語学習の適切な支援についての考察は行われていない。

なお、在留外国人ムスリムの日本語能力について触れた研究は、大人に関してならある。青山(2020)の第4章「日本におけるムスリムコミュニティの形成と日本語能力」の中に、大人のムスリムへのインタビューがあるが、インタビューした24名のうち、日本語ができたのは6名に過ぎず、日本で生活するには日本語能力が不可欠であることが事例ともに述べられている。

第2章 インタビューから見たムスリムの状況

第1節 インタビューの概要

調査は、筆者(三浦)が中部および関西のモスクで行なった。インタビューの回答者は、全員が女性で、モスクの責任者の妻が2名、マドラサの教師が3人であった。また、回答者の母語は、日本語が4人、日本語以外が1人であった。さらに、モスクCおよびEについては、同席していた女性数人も加わった。

インタビューは、第2節にある10の質問について行った。この10の質問について、回答者自身の考えと、回答者が感じる周囲のムスリム・ムスリマの考えなどを語ってもらった。

第2節 10の質問に対する回答

質問1 ムスリムの児童生徒は何人いるか。

5名とも「わからない」と回答した。彼女たちが把握できるのは、マドラサに来ている子ども達であり、実際には、マドラサに来ない子どもや父親もモスクに来ない家族はたくさんいるだろうと語った。各モスクで通常、マドラサに集まる子どもの人数は、モスクAが約50人と突出しており、他の4か所については、どこも20から30人程度であった。しかし、イード⁽³⁾ともなればどこのモスクも200～300人、またはそれ以上のムスリムが集うという。そこからみてもマドラサに集まる子どもの人数は周辺に暮らすムスリムの一部でしかないことが分かる。

また、居住地によって訪れるモスクが決まるわけではなく、各自が自由にモスクを選んでいく。そのため、複数のモスクのマドラサに参加する子どもや、居住地のモスクへ行かず、わざわざ遠方のモスクへ行く子どももいるという。

質問2 ムスリムの子ども達は、教科学習に遅れが見られると思うか。

モスクDの回答者のみが学習に遅れが見られるとは感じていないと回答した。一方、その他の4か所では子どもの学習の遅れを指摘していた。両親共仕事で精一杯の家庭では子どもの学習に頓着せず、「毎日学校に行っているから問題ない」と考えて、子どもの日本語が未熟なことも、教科学習に遅れが見られることも、親はまったく気づいていないといったケースや、日本語能力が伴わず、中学卒業後進学できないケースが明かされた。また、子ども達は、一定レベルの生活言語能力はあるが、学習言語能力が劣るため教科学習に躓くのだとする指摘があった。

モスクAの回答者は、「学習の遅れが日本語能力の問題であっても、子ども達はそれに気づかず、自分は出来ない人間だと思ってしまっている。日本人と同じように学校生活を送っているながら自分だけできないという体験を積み重ねていくことで自己否定が強くなるようだ」と語った。

質問3 学力向上のための支援をしているか。

モスクは礼拝の場であり、マドラサはクルアーンやアラビア語を勉強する場であるため教科学習等の支援は行わないし、教科学習に関する相談もない。また、仮に支援を行うにしてもそのための資金を調達しなければならないが、親が子どもの学力に危機感を持たなければ、資金も集まらないとのことだった。一方、質問2で、「学習の遅れを感じない」と回答したモスクDの回答者は、子どもには目立った問題は見られないが、母親に手助けが必要だと述べた。

母親に対する支援は5か所すべてが何らかの形で行っているが、それは支援者の使用言語や活動できる時間、関わり方によって様々である。モスクDの場合は、「多い時は、1時間に5回も依頼の電話が入り、アラビア語の授業が中断される」と言い、スタッフの増員、あるいは

母親たちが日本語を習得することを希望している。

質問4 親は子どもの教育に関してどう考えているか。

「国籍に関わらず、親自身が受けた教育に影響されると感じる」「日本の学校制度に対する認識不足の問題がある」「親の仕事を継ぐ場合、学校教育は重要視していないようだ」「子どもが乳幼児の場合、将来に対する実感がないようだ」などの回答があった。また、非識字者や地方言語しか話さない母親の割合が多い地域では、母親たちに学校教育の重要性や、制度の仕組みなどについて説明することも容易ではないとのことであった。

さらに興味深いのは、「日本の学校は遊びのようだ」という意見である。国によっては、小学1年生から進級試験を設けている。⁽⁴⁾モスクBの回答者は、「日本は勉強しなくても進んでいくので母親たちは気にしていない。遊びのようだと思っている」と述べた。そのため、子どもに仕事を継がせようと考えている父親は、母親同様日本の学校教育を重要視していないという。むしろ、親より生活言語に優れており、漢字の読み書きまでできる子どもに対する父親の評価は高いように感じると述べた。しかし、妻が日本人の場合はこの限りではない。また、進学させるか、でなければ小学校も行かせないかの両極端だという意見もあった。

質問5 日本の学校に行く必要はないと考える親はいるか。

ここでは、はっきり「いない」と回答するものはいなかったものの、5名とも「いる」とは明言せず、「必要ないと考える親とは直接接点はないが、多いと思う」「そのような話を聞く」と遠回しに回答した。親が日本の学校に行かせる必要はないと考える要因としては、子どもが乳幼児の場合、母親は日本での生活が続く可能性に対して実感が持てず、いずれは帰国するであろうと考えているからだという。また、「勉強が出来なければ親の仕事を手伝えばいいと考えている親もいる」と語った。このような回答がある一方で、国民性やムスリムとしての厳格さゆえに、日本の学校は危険だと考える親もいるとの回答もあった。

質問6 ムスリムの女性は家に籠る傾向があるか。

ここでは、「籠る」か「籠らない」かで回答は二分された。「籠る」とは、夫以外とは外出せず、おもに母国の家族とフェイスブックやスカイプを利用して交流して過ごすことを言っている。町の中心地で交通の便が良いところにあるモスクの回答者2人は「籠らない」と答えた。交通の便が良いので集いやすく住まいが近いため徒歩で訪れる女性もいるという。一方、地方にあるモスクの回答者3人は、モスクまでの公共交通機関がなく女性が気軽に集うことは困難だとした。

また、籠る女性は、パキスタン人が多いところは一致している。「籠る」と回答した回答者によると、パキスタンでもすべての女性が外部と関わろうとしないわけではなく、地方出身者

にその傾向が強いという。つまり、パキスタンの地方出身者が多いモスク周辺では、外部と交流しない女性が増えるということになるのである。また、このような女性たちは、日本での孤独な生活に耐えられず、子どもとともに帰国するという。また、そのような母親は、日本語能力も未熟であるが、日本語が必要な場合は夫が対処するため、日本語学習に対する意欲は低いという。そして、このような人々は、パキスタン式の生活をそのまま日本に持ち込んでいるため、考え方もパキスタン式だという意見もあった。

また、「籠らない」とする回答については、「国ごとにコミュニティがあり、そこで交流している」「モスクに集って交流している」「SNSでグループをつくって交流している」などがあった。これら籠らない母親たちに共通するのは、非識字者や地方言語のみ使用するといった母親がいない点である。

さらにある回答者は、「ムスリムは夫のいうことを聞かなければならない。それで天国に行ける」と答えているが、そこから考えると母親が自由に外出したり外部と交流できるかは、その夫に託されていると言える。

質問7 定住するとなれば子どもの教育を日本でしっかり行うべきだと考えるか。

全体では、少なくとも日本人ムスリマには、そのように考える人が多いだろうとしながらも、元来他者のプライベートには触れないため、親たちがどのように考えているのかはわからないとの回答だった。そのうえで、モスクに集まる人々は、みな行動的で教育熱心だとする回答の他に、まだ世代交代していない地域では、妻子を母国へ帰そうと考える父親が多いが、東京都や埼玉県では、3世、4世と世代交代が進んでおり、親が苦労を経験しているため、子どもの教育には熱心で、高校大学と進学することが当たり前になっているとの回答もあった。

質問8 ムスリムの子ども達にとって「良い進路」とはどのようなものか。

「わからない」「考えたことがない」が共通の回答であったが、「最初に両親に、日本で育てるか、それとも帰国させるかを聞きます。そして、日本で子育てをすることを考えている親に対しては支援するように努力しています」との回答や、「親のなかには、子どもにはムスリムとして正しい生活を送らせたいが、日本はイスラム教の国ではないため、子供への様々な影響を懸念している。そのため、子どものうちから日本と母国を行き来させたいと考える人もいる」などの回答があった。

質問9 学校に望むことはあるか。

共通の回答として、「日本の学校制度・教育制度を親に教えてほしい」「親から学校への要望は、給食・お祈り・服装に集約される」が挙げられた。さらに、1人の回答者が、「日本語ができなくて授業についていけない子どもに関しては、先生から保護者に子どもの実態を話して

ほしい」と回答した。また、学校側の対応は地域によって大きく違った。外国人児童生徒数が多く、対応に慣れている学校や、多文化共生に積極的に取り組んでいる学校がある一方で、支援者が学校側に、日本語が理解できない子どもについて相談しても、「親から直接申し出がなければ対応できない」とする学校もあり、ここでは、(ムスリム側の)支援者の話を受け入れてほしいとの回答があった。

質問6で見たように、日本語能力が未熟で家庭内でのみ過ごしている母親は子どもの学力不足に気付きにくく、さらに、自ら学校に出向くことは困難である。そのため、教室にとどまるだけの日々を過ごしている子どももいたという。

質問10 子どもには、ノンムスリムの子どもと友人関係を築いてほしいか。むしろ、距離を置かせたいか。

どの回答者も、日本で生活するうえで子どもが日本人(非ムスリム)と仲良くすることは良いことだと考える一方で、日本はイスラム教の国ではないため、服装や考え方に関する悪影響を懸念する声があるという。それについてインタビューに同席していたヤングムスリムが、「ムスリムの家庭では父親の影響力が大きいので、父親が積極的に子どものイスラム教育を行うことで、外部(学校・友人)からの悪影響は避けられるはずだ」と語ってくれた。しかし、モスクAの回答者は、親がイスラム教育を行うことについて、「イスラム教の国に生まれ、周りの環境から自然とムスリムになった人は、日本という全く違う環境の中で、子供たちが一体どのようにしてムスリムとして育つのが不安になる」という。親自身が教えられていなければ、教える術も持たないので、環境を重視することになるというのである。またその一方で、モスクDの回答者は、「子ども達が非ムスリムの友達をモスクに連れてきたり、ラマダン⁽⁵⁾の期間と一緒に給食を抜くなど、日本人の友達を巻き込んでおり素晴らしい」と語った。

第3節 考察

インタビューの結果、日本在住のムスリムの子どもの教育に関して、また、親の教育観についてその一端が明らかになったのではないと思われる。

ここで問題として挙げられるのは、インタビューを行ったモスク5か所中、4か所の取材対象者が子ども達に学習の遅れがみられると回答したことである。そこで、インタビューの回答から、学習が遅れる主な原因と思われる点について、以下に3点挙げる。

1. 子どもの学習言語能力が低い

インタビューでは子どもの学習言語能力が伸びない理由として、子どもの日本語能力に対する親の過大評価が挙げられた。質問4にあったように、日本語の読み書きの能力が未熟であっても会話力だけで生計を支えている父親たちは、漢字の読み書きができ、日本人同様に学校に

通り、さらに先生から何の問題の指摘もされなければ、子どもの学習活動は十分なのだと考えるのだという。そのため、生活言語能力が高い子どもほど、学習の遅れが日本語能力にあるとは気づかれにくいのではないと思われる。そして、そのような場合は、子ども自身も自分の日本語能力に問題を感じないため、「勉強できないのは頭が悪いからだ」「自分は出来ない人間なのだ」と自己に対して否定的になるという。そのため、質問2にあったように、親子共々、子どもの学習言語能力が未熟であることに気付かないことが問題だと考えられている。なお、質問3にあるように、マラドサは、クルアーンやアラビア語を勉強する場であり、学習支援は行っていないため、日本語の学習は、やはり学校で行わなければ機会がないことになる。

2. 低学力に対する危機感が希薄な親がいる

質問4で、「親の教育観は国籍のみならず、親自身が受けた教育に影響されるようだ」との回答があったが、自身がもともと留学生として来日しており、子どもの学力強化は必須であると考えた親や、日本語が完璧でない自分たちに子どもの学習補助は困難だと考えて、小さいころから学習塾に通わせている親がいる一方で、子どもが学校から成績に関する指摘を受けることもなく、落第もせず、毎日元気に学校へ行っていることに安心している親は少なくないということであった。

ただ、親は子供の将来に無関心なのではなく、生活が安定しないうちは、何も考えられないということのようだ。質問5や7からわかるように、世代交代していない地域では、「妻子を帰国させたい」と考える父親や「遠からず帰国できるだろう」「早く子供と帰国したい」と考える母親も多く、また、もし勉強が出来なくても親の仕事を継いでくれればいいなどの理由で、学校の成績や就学そのものを重視しない親もいることがわかった。

3. 日本の学校は危険だ

質問5にあるように、日本の学校に通うことでムスリムとして悪影響を受けると考える親がいるという。そのような親は、学校よりマドラサでクルアーンを学ぶことを重視する傾向にあるとのことだった。また、質問10にあるように、日本人と仲良くすることは良いことだしながらも、子どもがイスラームでない国の文化を身につけることに不安を抱く親も少なくないとの指摘があった。

以上、モスクの責任者の妻2名、マドラサの教師3名へのインタビューから、ムスリムの子どもたちの学習状況や、子どもの教育に対する親の考えの一端が明らかになった。では、次に、ムスリムの子どもと両親へのアンケート調査により、より深く探っていくことにする。

第3章 アンケート調査

第1節 子どもアンケートの結果

1-1 回答者の学年と性別

本調査の回答者は121人で、男子が47.1% (57人)、女子が52.9% (64人)である。回答者の学年は、小学生が75.3% (91人)で、中学生が24.7% (30人)である。内訳は、小学1年生19人、2年生14人、3年生18人、4年生9人、5年生19人、6年生12人、中学1年生7人、2年生13人、3年生9人、学年無記入1人である。

1-2 来日年齢

来日年齢についての集計結果を示す。なお、低学年の子どもや一時帰国の回数が多い子どもは、記憶があいまいで、おおよその年齢を記入していた。「日本生まれ」が全体の47.1%で最も多く、次いで「0～3歳」が22.3%、「4～6歳」が16.5%、「7～9歳」が9.1%、「10～12歳」が3.3%と年齢が上がるにつれて減っている。なお、無記入が2人いた。

1-3 得意言語

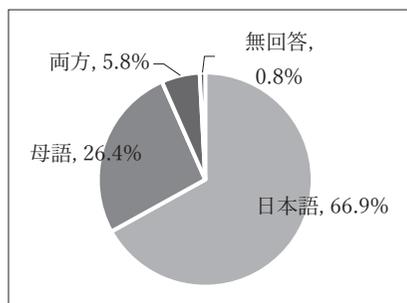


図1 得意言語

図1は、得意言語についての集計結果を示したものである。得意言語は「日本語」が66.9%、「母語」が26.4%、「両方」が5.8%の順であった。しかし、この回答は、子どもの客観的な日本語能力を示すものではなく、あくまで子どもがどのように感じているかを示したものである。従って得意言語が「日本語」と回答した子どもの中にも年相応に日本語能力のない子どもも含まれていると考えられる。

1-4 家族間言語

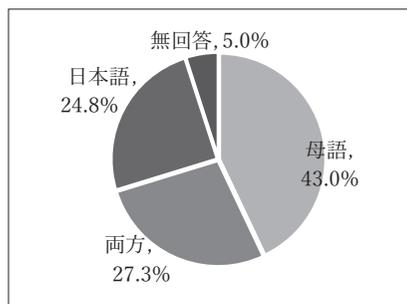


図2 家族間言語

図2は、家族間言語についての集計結果を示したものである。家族で話すとき最も多く使われているのは、「母語」で43.0%、次いで「両方」27.3%、「日本語」24.8%の順であった。これにより、「日本語が得意だ」と感じている子どもが66.9%いたが、必ずしも、その全員が家族間で日本語を使用しているわけではないことがわかる。このことについては、次の表1を見てほしい。

表1 家族間言語と得意言語

		回答数 (人)	家族間言語				合計
			日本語	母語	両方	無回答	
得意言語	日本語	81	33.3%	27.2%	34.6%	4.9%	100.0%
	母語	32	6.3%	81.3%	9.4%	3.1%	100.0%

表1は、家族間言語と得意言語が「日本語」と「母語」の場合についてのクロス集計の結果である。得意言語が「母語」の子どもの81.3%が家族間でも母語を使用していた。一方、得意言語が「日本語」の子どもの家族間言語は、「日本語」33.3%、「母語」27.2%、「両方」34.6%と分散されていた。母語が得意だと感じている子どもの多くは家族間でも母語を使用するが、日本語が得意だと感じている子どもは、家庭の状況によって使用言語に違いがあることがわかる。

表2 家族間言語と親の出身国

	回答数 (人)	家族間言語				合計
		日本語	母語	両方	無回答	
同国の外国出身者	66	6.1%	69.7%	21.2%	3.0%	100.0%
別々の外国出身者	9	44.4%	11.2%	44.4%	—	100.0%
父親が日本人	8	25.0%	12.5%	62.5%	—	100.0%
母親が日本人	29	55.2%	6.9%	27.6%	10.3%	100.0%

表2は、家族間言語と親の出身国のクロス集計の結果である。両親の「母語」が共通する場合、家族間でも「母語」を使用する子どもが多い反面、両親の「母語」が異なる場合は、「母語」の使用が少ない結果となった。両親の国籍が違う場合は、家庭内で「日本語」がリンガフランカとなっているのだろう。また、親が日本人の場合については、母親が日本人の場合は、「日本語」を使用する子どもが最も多いが、父親が日本人の場合は、「両方」が最も多かった。この結果、子どもは、母親の使用言語に影響されていると考えられる。

1-5 好きな教科・嫌いな教科

ここでは、好きな教科・嫌いな教科とその理由を自由回答で行ったため、教科は複数回答となり、好きな教科は123、嫌いな教科は130の回答があった。また、理由は「楽しい」「得意」「難しい」「分からない」といった漠然としたものが多かった。表3、4は、今回の調査とバンダイが2019年2月におこなった「小中学生の勉強に関する意識調査」⁽⁶⁾の中の好きな教科と苦手な教科の調査結果を比較したものである。

表3 小学生の好きな教科・嫌い(苦手)な教科

好きな教科					嫌い(苦手)な教科				
	バンダイ		本調査			バンダイ		本調査	
1位	算数	27.0%	図工	30.8%	1位	算数	22.5%	国語	35.2%
2位	図工	22.5%	体育	30.8%	2位	国語	18.8%	算数	29.7%
3位	体育	21.8%	算数	14.3%	3位	体育	9.8%	理科	7.7%
4位	国語	19.0%	国語	9.9%	4位	社会	6.5%	社会	6.6%
5位	音楽	16.2%	理科	5.5%	5位	図工	5.5%	体育	6.6%
その他	無い	20.2%	無い	—	その他	無い	38.0%	無い	13.2%

表4 中学生の好きな教科・嫌い(苦手)な教科

好きな教科					嫌い(苦手)な教科				
	バンダイ		本調査			バンダイ		本調査	
1位	数学	21.3%	体育	33.3%	1位	数学	27.0%	数学	40.0%
2位	社会	19.3%	英語	23.3%	2位	国語	18.7%	国語	26.7%
3位	英語	17.3%	理科	13.3%	3位	社会	16.0%	社会	13.3%
4位	体育	16.7%	数学	10.0%	4位	英語	14.3%	英語	10.0%
5位	理科	13.7%	国語	10.0%	5位	理科	10.7%	理科	10.0%
その他	無い	22.0%	無い	3.3%	その他	無い	22.3%	無い	3.3%

まず、表3より小学生の好きな教科を見ると、2つの調査結果は、上位4位までに同じ教科がランクインした。ただし、バンダイの調査では1位が算数であるのに対して、本調査では図工と体育といった日本語能力にさほど影響のない技能教科にそれぞれ30.8%と高い値を示した。一方、嫌い(苦手)な教科については、どちらの調査結果も算数と国語が上位を占めた。しかし、本調査では上位2教科の割合が高く、3人に2人は国語か算数が嫌いだと感じていると言える結果となった。算数と国語について、バンダイの調査では、苦手な教科の1位と2位にあがってはいるが、どちらも好きな教科としての割合の方が大きいことから、苦手だと感じている子ども以上に、好きだと感じている子どももいることがわかる。しかし、本調査の場合は、算数または国語が嫌いな子どもの方が明らかに多い結果となった。また、バンダイの調査では、苦手な教科は「ない」が38.0%で実質最多であったが、本調査では嫌いな教科は「ない」が13.2%にとどまった。

次に中学生について見ていく。本調査では小学生同様、好きな教科に体育を上げる子どもが33.3%と最も多かった。また、2位は英語であった。一方、嫌い(苦手)な教科に関しては、表4にあるように、両調査で全く同じ教科がランクインした。ただし、本調査では、小学生同

様1位と2位がその割合を大きく占めており、特に1位の数学は40.0%と目立つ結果となった。これ対して、バンダイの調査では苦手な子どもが増えてはいるが、小学生同様好きな教科でも数学が1位であった。

なお、「好きな教科」「嫌いな教科」の理由には次のようなものが見られた。算数（数学）では、好きな理由は「楽しい」「得意だ」が多数だったが、「数字なら大丈夫」といった理由もあった。また、嫌いな理由としては、計算に関するものが最多だったが、「漢字が多い」「テストの漢字がわからない」といった漢字に関わる理由も見られた。一方、バンダイの調査では、好きな理由としては「計算が好きだから/得意だから」という声が多く、苦手な理由としては「計算が嫌いだから/苦手だから」という声が多く上がったとあるが、「漢字がわからない」といった日本語能力に関する記述はなかった。つまり、算数（数学）と日本語の能力は、一見関係がなさそうに見えるが、算数（数学）においても、文章題などの場合は、当然のことながら、そこに書かれている日本語を読み、理解しないと解けない。しかし、このことは、なかなか周囲には気づいてもらえないのではないだろうか。

国語の場合は、好きな理由として漢字や音読が多かった反面、嫌いな理由も漢字に関するもの、次いで「発音や読み方が難しい」があり、少数だが「動詞や形容詞などがわからない」「日本のことをよく知らない」といった理由もあった。社会の場合は、嫌いな理由で最も多かったのが「歴史の漢字が多い・難しい」であった。これらを見ると、国語以外の教科でも漢字の理解が学習の鍵となっていることがわかる。最後に、英語に関しては、好きな理由は「簡単だから」「話せるから」といった理由で占められていたが、嫌いな理由は「覚えられない」「意味がわからない」などがあつた。

1-6 学校の先生の日本語がわかるか

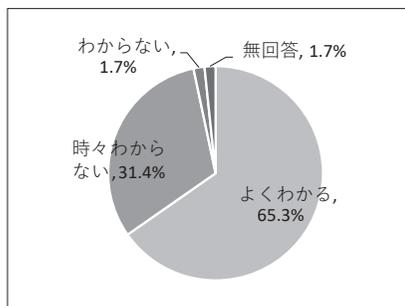


図3 学校の先生の日本語がわかるか

図3は、学校の先生が話す日本語が理解できるかについて集計結果を示したものである。ここでは、授業だけでなく学校生活の中で行われる様々な教員の問いかけや指示などを含めて「わかる」「わからない」を判断してもらった。結果は、「良くわかる」65.2%、「時々わからない」31.4%、「わからない」1.6%となった。更に、「時々わからない」と回答した子どものうち、その約半数が得意言語で「日本語」を選択していた。

彼らは、母語より日本語の方が得意だが教員の発言が理解できなときもある。つまり、約3割の子どもは、周りとうまくコミュニケーションが取れているように見えて、実際は理解できていない時もあるということを表している。また、「よくわかる」と回答した中に得意言語も家族間言語も母語を選択した子どもが13名いた。その子たちについては、理解できていな

い自覚がない可能性がないかを確認、観察する必要がある。

1-7 教科書が理解できるか

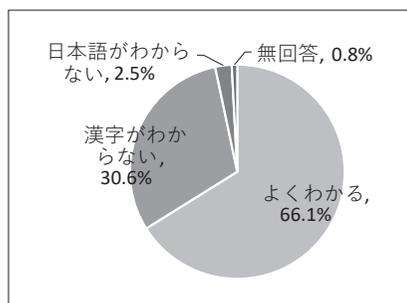


図4 教科書が理解できるか

図4は、教科書が理解できるかについて集計結果を示したものである。ここでは、学習内容ではなく日本語の理解として質問している。結果は、「よくわかる」66.1%、「漢字がわからない」30.6%、「日本語がわからない」2.5%となった。漢字や日本語がわからないために、教科書の理解が滞る子どもが約3割とになっているが、教科書が正しく理解できなければ、予習復習や宿題等の家庭学習が困難だと考えられる。また、「学校の先生の日本語がわかるか」とのクロス集計の結果、教員の日本語も教科書も共によくわかる子どもは、全体の54.5%と約半数に留まった。

1-8 学校の勉強で困っていることはあるか

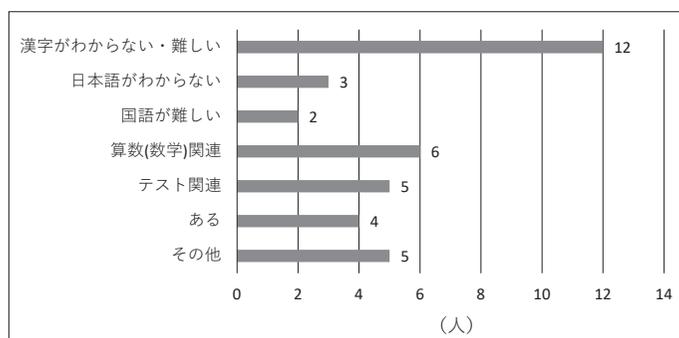


図5 学校の勉強で困っていることはあるか

図5は、学校の勉強で困っていることはあるかについて集計結果を示したものである。「ある」と答えたのは全体の30.6%だった。図5は、「ある」と答えた37人を対象に困っている内容についての自由回答の集計結果である。

「漢字」に関するものが特に多かった。ただ、図4で教科書の「漢字がわからない」とした30.6%は、人数にすると37人になるが、「漢字がわからない・難しい」ので困っていると答えたのは、その1/3に過ぎなかった。これは教科書の漢字がわからなくても困っていないのか気にかかる結果である。

次に「足し算がわからない」「分数がわからない」「数学の基本ができない」などの算数(数学)に関わること、そして、「ある」とだけ記入した者が4人いた。さらに、「テストができない・わからない・いい点が取れない」などのテストに関するものが続いた。また、「難しい・わからない」「パパやママに怒られる」「勉強方法がわからない」をその他とした。

1-9 塾や習い事をしているか

塾や習い事をしているかという質問に「はい」と答えたのは、本調査では小学生38.5%、中

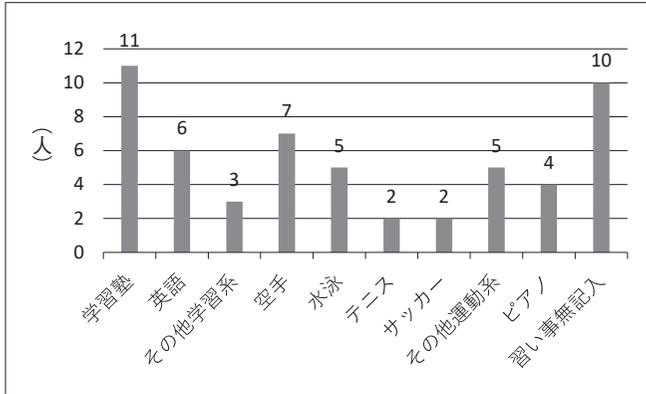


図6 塾や習い事をしているか

学生30.0%だった（全体では36.3%）。一方、学研教育総合研究所⁽⁸⁾が行った「小学生の日常生活・学習・新型コロナ対策の休校に関する調査」によると、習い事をしている小学生の割合は78.7%、「中学生の日常生活・学習に関する調査」では、69.3%の中学生が習い事をしているという結果であった。これ

らの結果を比べるとムスリム児童生徒の習い事をしている子どもの割合は、日本人の子どもの半数以下といえよう。

図6は、「はい」と回答した44人の習い事の内容についての回答である。最も多かったのは「学習塾」で次が「空手」であった。また、「その他学習系」は、日本語教室やトルコ学校といった外国人特有の習い事が入った。その他、マドラサは習い事に含まないようにと事前に指示したが、それでもアンケート回収後「マドラサ」の記入が数件あったため、それらは「いいえ」とした。なお、そこから考えると、「はい」と答えていながら具体的な習い事の記入がなかった10人全員が習い事をしているかは、わからない。

1-10 になりたい職業

ここでは、将来就きたい職業を自由回答してもらった。小学生の1位は、医師や看護師、薬剤師などの医療関連で、1名を除いて女子だった。また、2位の自動車関連は全員男子と、性別で大きく分かれた。中学生は、スポーツ選手が1位で全員男子、2位はイスラーム学者と教育関連が同率だった。

関係者へのインタビュー調査で、モスクAの回答者が「将来の夢がない子どもが多いのではないかと懸念していたが、少なくとも今回のアンケートから見ると安堵できる結果となった。また、同氏は「男子はイマーム、女子はアーリマと答える子が多い」と、将来の職業に多様性が見られないことに、生きる意欲や学習への意欲が減退しているのではないかと危惧していたが、今回のアンケートでは、全部で26種類の職業が挙げられており、イスラーム学者に極端に集中するということにはなかった。子どもは子どもなりに本音と建て前を使い分けているのだろうか。

1-11 日本人の友達がいるか。なにをして遊ぶか。

表5 なにをして遊ぶかTOP5

バンダイ					
中学生			小学生		
1位	スマートフォン・携帯電話 タブレット端末・パソコン	63.3%	1位	遊具遊び 鬼ごっこ・かくれんぼなど	51.2%
2位	お買い物	41.0%	2位	ゲーム (家庭用)	44.8%
3位	娯楽施設 (映画・カラオケボー リング場など)	36.3%	3位	おもちゃで遊ぶ (ごっこ遊び・ ままごと含)	41.5%
4位	ゲーム (携帯用)	35.0%	4位	球技 (サッカー・バスケ・ドッ ジなど)	40.2%
5位	ゲーム (家庭用)	30.7%	5位	ゲーム (携帯)	39.8%

本調査					
中学生			小学生		
1位	球技 (バスケ・サッカー等)	23.1%	1位	遊具外遊び・鬼ごっこなど	43.7%
1位	おしゃべり	23.1%	2位	球技 (サッカー・バスケ・ドッ ジなど)	21.8%
3位	ゲーム	15.4%	3位	いろいろ	9.2%
4位	買い物	11.5%	4位	ゲーム	8.0%
5位	カラオケ	7.7%	5位	室内遊び (ままごと含)	5.7%
その他	無回答	26.9%	その他	無回答	14.9%

結果は、「はい」93.3%、「いいえ」5.7%（無回答が1人）で、ほとんどの子どもが日本人の友達がいる結果となった。先の関係者インタビューでは、ムスリムの児童生徒が多数在籍する学校周辺では、ムスリム同士が固まってしまう友達作りができていないのではないかと心配する声もあったが、安心できる結果となった。

表5は、「遊びのTOP5」をバンダイの調査結果⁽⁷⁾と比較したものである。バンダイの調査結果では、複数回答が多くそこから子どもが友達といくつかの遊びをしていることがわかる。また、中学生ではTOP5すべて、そして小学生は2位と4位が確実に学外での遊びであるといえよう。

一方、本調査では、複数回答はほとんどなく「日本人の友達がいる」とはしながらも、遊びについては無回答が中学生26.9%、小学生14.9%あった。さらに、学外の遊びは中学生が3位から5位まで、小学生は4位に「ゲーム」が入ったのみだった。本調査では複数回答が少なかったことを鑑みると、日本人の友達との遊びは学内での割合が多いといえる。ムスリムの児

児童生徒の多くは、学校生活においては友達がおり、仲良く過ごしていると考えてもいいのではないだろうか。しかし、休日や平日の夕方など学校以外の場所で日本人（ノンムスリム）の子どもと遊ぶ機会が少ない可能性は否定できない。また、インタビューに協力してくれたBモスクの回答者が、「子どもを日本人（ノンムスリム）の友達の家遊びに行かせることを躊躇する」と発言している。理由はおやつの問題である。ハラルフード以外のものを出されて子どもたちが知らずに食べてしまうことを心配する親が、学校以外で子ども達がノンムスリムの子どもと遊ぶことに積極的になれないのだ。このことは学校以外で日本人の友達と遊ぶ子どもが少ない一要因といえるのではないか。

1-12 どれくらい国へ帰るか。

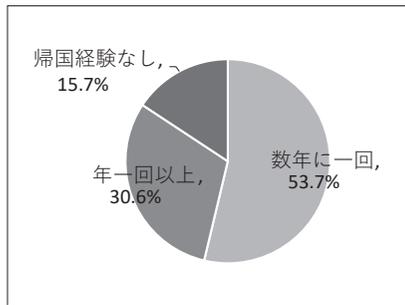


図7 帰国頻度

図7は、帰国頻度について集計結果を示したものである。帰国経験があるのは全体の84.3%で、その頻度は子どもの人数や年齢、出身国までの距離や国の情勢など、各家庭事情によって異なる。先のBモスクのインタビュー回答者は、子どもが幼く祖父母が健在なうちは定期的に帰国するが、祖父母が他界したり、子どもが受験などを控えるようになると帰国しなくなると述べた。一方で、1年間に複数回帰

国するものもいるが、これについてAモスクとBモスクのインタビュー回答者は、「母親が、いつか遠くないうちに母国に戻れると考えている家庭は、積極的に帰国するように感じる」と述べていた。

1-13 何日くらい帰るか。帰国中の言語は何か。

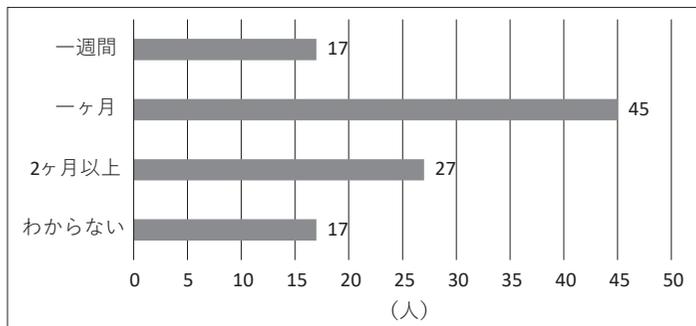


図8 帰国期間

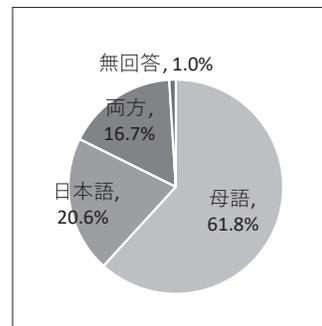


図9 帰国中の言語

図8は、図7のうち帰国経験のある102人を対象にした帰国期間の集計結果を示したものである。最も多かったのは「1か月くらい」45名で、夏休みを利用しての帰国が多かった。帰国

期間に関しては、国籍や学年に偏りは見られなかった。

図9は、親の出身国に滞在中に使用する言語の集計結果である。最も多かったのは「母語」61.8%、次いで「日本語」、「両方」と続いた。調査前は、ほとんどの子どもが母語使用になると予想しており、長期間の帰省は、子どもの日本語能力が衰えて学習に支障をきたす要因の一つとなっているのではと憂慮していたが、予想に反して極端な結果にはならなかった。ただし、母語使用の63人中40人は、家族間で母語使用者であった。日本語学習及び習得の機会が概ね学校に限られている子どもたちが、1～2か月の間母語のみが使用される環境の中で生活するのは、彼らの日本語力を後退させる要因となりうるといえる。

まとめ

本章では、子どもに関する設問について個別に見てきか、ここでは、回答結果全体について考察する。日本生まれの子どもの割合が47.1%と高いこともあってか、親の母語よりも日本語の方が得意だとする子どもは、全体の7割近くとなったものの、だからといって家族間でも日本語を使っているということではなく、母語や両方使用するという子どものほうが多かった。ただ、傾向として母親が日本人、あるいは両親が別々の外国出身者の場合は、家族間で日本語を使う割合が高く、両親とも同じ国の場合は、家族間で母語を使う割合が高いといえる。なお、今回は、両親の国の言葉を母語としたが、日本生まれの子どもで、両親の母語が充分ではない子供は、日本語が母語であり、両親の母語は継承語といったほうがいいたろう。また、日本語が母語であるにもかかわらず、日本語の能力が低いなら、ダブルリミテッドになっている可能性がある。このことは、今後注意深く観察していかなければならないだろう。

次に、教科学習に関しては、日本語能力にさほど影響を受けない技能教科に人気が集まり、国語と算数(数学)を苦手とする子どもが多い結果となった。そして、漢字が多くの教科に影響していることが確認できた。これは、いわゆる非漢字圏と言われる国の言葉が母語の日本語学習者に共通の問題だが、日本で生まれ育って日本語が母語である子どもが、漢字ができないために、教科学習に影響があるとすれば、やはりダブルリミテッドにつながりかねない。また、どの子どもにも共通する問題としては、日常会話はできて、授業についていけない場合、学習言語がわかっていない可能性がある。漢字がわからないことが学習言語が身につけていないことにつながっている可能性もある。この「学習言語が身につけていない」という点についても、今後注意深く見守る必要があるだろう。

そして、英語に関しては、例えば既に英語に接していたり、家族間で英語を使用しているなどの理由で「らくで楽しい教科」と感じる子どもがいる一方で、苦手とする子どももいる。ムスリムの児童生徒の場合、学習すべき言語が、親の母語、日本語、アラビア語、とすでに三言語あり、そこに英語が加わることで言語習得に負担を感じる子どもがいると考えられる。

なお、学校の先生の日本語も教科書もともによくわかる子どもは、全体の半数を超えたが、

逆に考えると、約半数が日本語になんらかの課題を抱えている可能性があるともいえ、今後、「ダブルリミテッド」「学習言語の問題」の可能性も含め、細かな日本語の支援を行う必要があるといえるだろう。

最後に、帰国状況に関しては、夏休みを利用した帰国が多かったが、中にはその前後も含めて2か月以上帰国する子どもも少なくなかった。ただ、帰国中に母語を使用するという子どもの多くが普段家族間でも母語を使用していた。すべての子どもが頻繁に帰国していたわけではなかったが、帰国経験者の約3割が年に1回以上帰国している結果となった。これらの要素は学習の行きつ戻りつの繰り返しを誘発する一要因となりうるものと考えられる。

第2節 父母アンケートの結果

子どもアンケートの回答者121人に配布した「おとうさんアンケート」の回収率は28.9% (35人)、「おかあさんアンケート」の回収率は、27.3% (33人)だった。また、夫婦でこたえてくれた人は27組であった。父親は40代が最も多く、母親は30代が最も多かった。出身国は16か国からなり、父親、母親共にパキスタンが最も多かった。また、日本人は父親2人、母親7人であった。

2-1 日本語能力

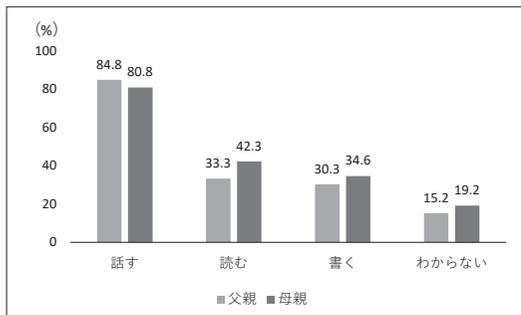


図10 日本語能力

図10は、親の日本語能力についての集計結果である。ここでは、日本人回答者は除外している。まず、話すことができるものは、父親84.8%、母親80.8%いたが、一方で、読み書きができる親は3~4割程度であり、漢字に関しては、父親は「読む」2人、「書く」1人、母親は、「読む」「書く」各1人しかいなかった。

2-2 子どもの日本語能力と母語能力

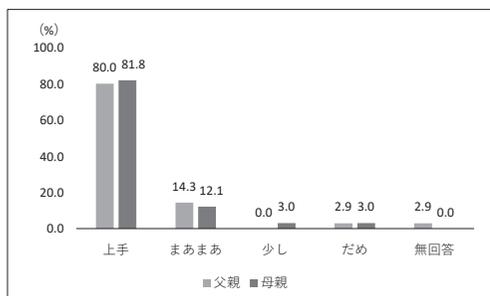


図11 子どもの日本語能力

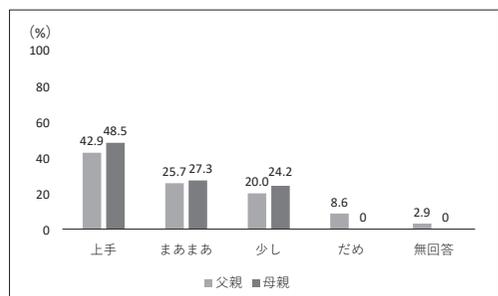


図12 子どもの母語能力

ここでは、わが子の日本語能力を親はどのように評価しているかを見た。図11は、その集計結果である。父親80%、母親81.8%と大半が「上手」と回答しており、父親・母親共に子どもの日本語能力を高く評価していることがわかる。

一方、図12は、子どもの母語能力についての集計結果である。わが子の母語能力に対する親の評価は、日本語より低いものとなった。「上手」が父親42.9%、母親48.5%で最も多かったが、両親とも半数に満たなかった。

2-3 子どもの得意言語

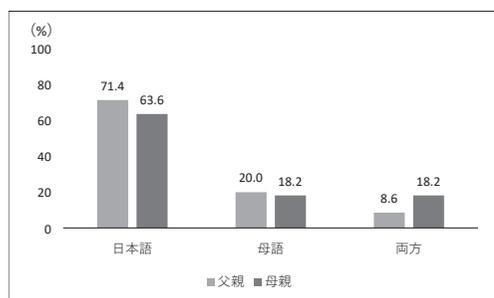


図13 子どもの得意言語

図13は、子どもの得意言語についての集計結果である。親が考えるわが子の得意言語は、「日本語」が父親71.4%、母親は63.6%と最も多かった。また、父親は、「母語」20.0%、「両方」8.6%と、「両方」が最も少なかったが、母親の方は、それぞれ18.2%と同率だった。また、この結果は、子どもアンケート「得意言語」(図1)の回答結果とあまり大きな違いは見られなかった。

2-4 学校のお知らせ(プリント・メール)がわかるか。担任の先生と話すか

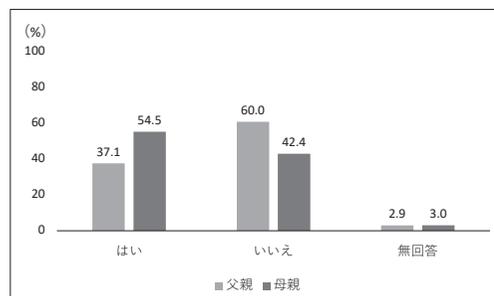


図14 学校のお知らせ(プリント・メール)がわかるか

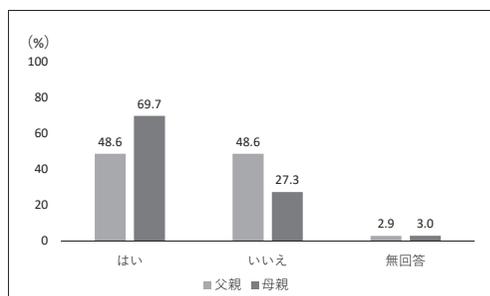


図15 担任の先生と話すか

図14は、子どもの小中学校から配布される印刷物やメールの理解についてきた集計結果である。まず、父親は、「いいえ」が60.0%と最も多く、「はい」は37.1%、そして無回答2.9%となった。逆に母親は、「はい」が54.5%と最も多く、「いいえ」は42.4%、そして無回答3.0%となった。この結果は、父親より母親の回答者の方に日本人が多く、その数がそのまま「はい」に反映された形となった。さらに、「はい」の回答者から日本人(父親2人、母親7人)を除くと「日本語能力」(図10)で「読む」ことができると回答した回答者数と一致した。ただし、この中で漢字まで読めるものは1人だけだったため、実際に学校から配布される印刷物やお知

らせメールがどの程度理解できているかは定かではない。

次に、図15は、親自身が子どもの担任教師と会話するかについての集計結果である。ここでは、先の質問、「図14学校のお知らせ（プリント・メール）がわかるか」に比べて「はい」が増加した。これは「日本語能力」（図10）の親の日本語能力で、話すことができるとした父親が84.8%、母親が80.8%と多かったことと関係している。

2-5 日本に住み続けたいか。妻子を早く帰国させたいか／早く子供と帰国したいか。

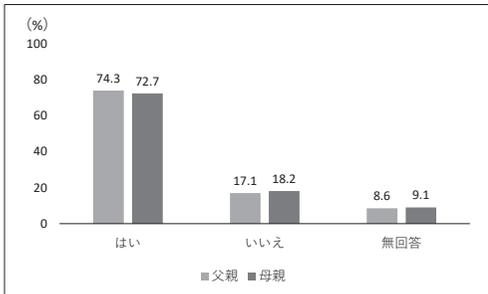


図16 日本に住み続けたいか

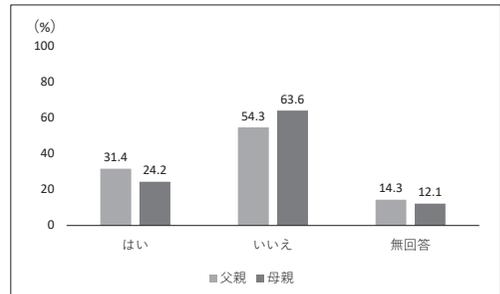


図17 妻子を早く帰国させたいか／早く子供と帰国したいか

図16は、継続して日本に住みたいかについての集計結果である。ここでは父親と母親の回答は酷似した。父親の74.3%、母親の72.7%が「はい」と回答し、7割強の親が継続して日本に住むことを希望していることがわかる。

一方、図16は、父親には「妻子を早く帰国させたいか」、母親には「早く子どもと帰国したいか」と質問した。図17は、その集計結果である。結果は、ともに「いいえ」が多く、父親54.3%、母親63.6%となった。また、「はい」は、父親31.4%、母親24.2%、「無回答」は、父親14.3%、母親12.1%となった。この結果から約3割の父親が妻子を帰国させたいと考えており、その数は帰国を希望する母親より多いことが分かった。さらに、この結果は「日本に住み続けたいか」（図16）の結果がそのまま反映されておらず、継続して日本に住みたい気持ちがある一方で、帰国させたい／したいという気持ちもあると答えたものがいたことを表している。

2-6 子どもには日本の暮らしに慣れてほしいか

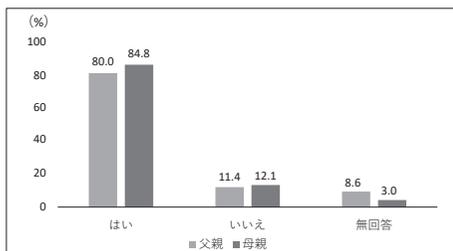


図18 子どもには、日本の暮らしに慣れてほしいか

図18は、子どもには、日本の暮らしに慣れてほしいかについての集計結果である。ここでは、「はい」が父親・母親ともに8割以上となり、大半の親が日本で生活するうえで、子どもには日本の暮らしに慣れてほしいと考えているといえる。また、父親の中に「出身国と日本の両方に慣れて

ほしい」とのコメントがあった。コメントを残したのは1名であったが、親の気持ちを思えばそのような考える親は少なくないと推察できる。

2-7 子どもが日本人と友達になることは良いことか

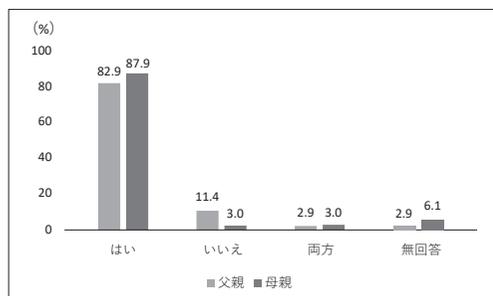


図19 子どもが日本人と友達になることは良いことか

図19は、子どもが日本人と友達になることに対する集計結果である。ここでは、父親82.9%、母親87.9%と大半が「はい」と回答した。そして、僅かではあったが「いいえ」と回答した父親11.4%と母親3.0%については、全員が「妻子を早く帰国させたいか／早く子供と帰国したいか(図17)の質問に「はい」と回答していた。いずれ帰国するならば、日本人の友達を作る必要はないとの考えだと思われる。

2-8 マドラサは日本語でやってほしいか

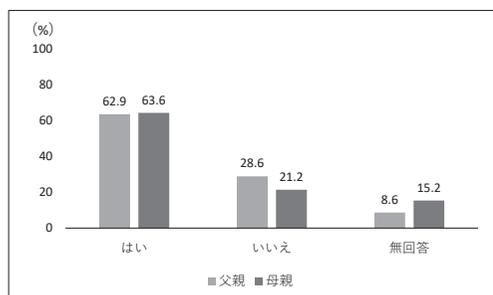


図20 マドラサは日本語でやってほしいか

ここでは、子どもたちがクルアーンやアラビア語を学ぶ場所を指す。マドラサでは通常イマーム、アーリマと呼ばれるイスラーム学者が子どもたちの指導にあたっている。この調査に協力頂いたモスクでは、日本語がまったくできない指導者から日本語で指導できる方指導者まで様々であった。ここでの回答結果は図20にあるように、「はい」が父親62.9%、母親63.6%と多く、約6割の親が日本語での指導を希望している。

2-9 学校は行っても行かなくてもいいか

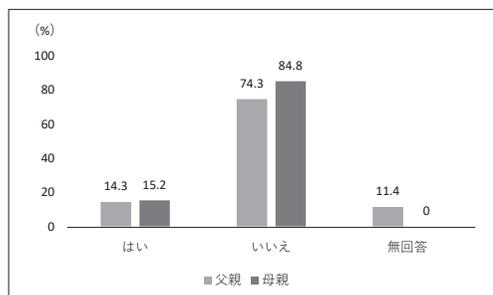


図21 学校は行っても行かなくてもいいか

関係者インタビューの中で「親の中には学校よりマドラサを重視する人もいる」という発言をうけて、このような質問をした。図21は、その集計結果である。父親74.3%、母親84.8%が「いいえ」と回答し、大半の親が学校へは行くべきだと考えていることがわかった。ただし、父親14.3%、母親15.2%と少数ではあるが「はい」と回答した親と、「無回

答」父親11.4%がいる点は無視できないところである。

2-10 日本で高校・大学まで行かせたいか。外国の学校へ行かせたいか。

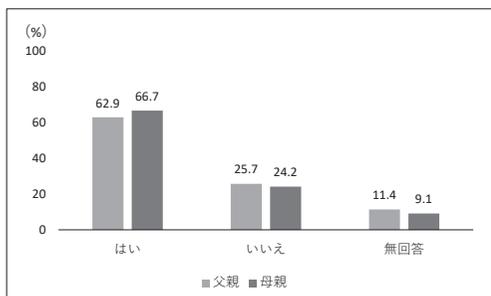


図22 日本で高校・大学まで行かせたいか

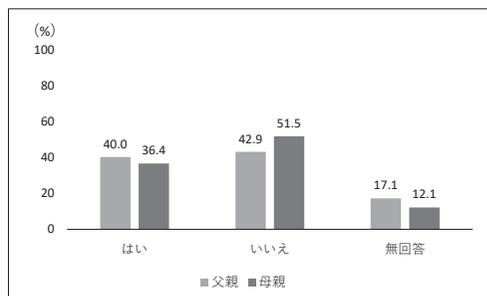


図23 外国の学校へ行かせたいか

図22は、日本国内で高校・大学への進学を望んでいるかについての集計結果である。ここでは、「はい」は父親62.9%、母親66.7%で、親の6割強が日本で高校・大学への進学を考えている結果となった。一方で、図23は、海外進学を希望するかについての集計結果である。ここでは、「はい」は父親40.0%、母親36.4%、「いいえ」は父親42.9%、母親51.5%となった。これにより、4割近くの親が出身国やイスラム教の国の学校またはムスリムのインターナショナルスクールといった日本国内の一般の学校に通わせる以外の方法を選択肢としていることがわかる。また、無回答が父親17.1%、母親12.1%と、比較的多かった。一見すると図22とは矛盾する結果となった。

2-11 日本の学校に満足か。日本の教育に任せるのは心配か。

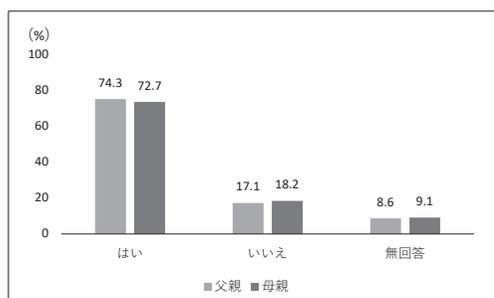


図24 日本の学校に満足か

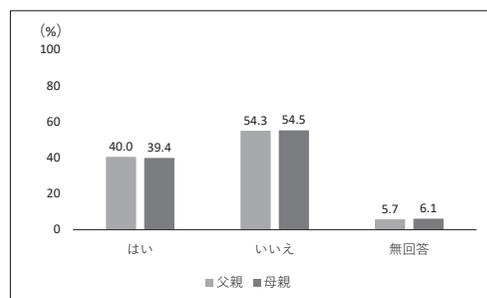


図25 日本の教育に任せるのは心配か

図24は、日本の学校に満足しているかについての集計結果である。ここでは、父親74.3%、母親72.7%が「はい」と回答しており、親の約7割が日本の学校に満足している結果となった。

一方、図25は、日本の教育に対して懸念があるかについての集計結果である。ここでは、父親54.3%、母親54.5%が「いいえ」と回答したものが多かったが、一方で、「はい」は父親40.0%、母親39.4%と親の約4割が日本の教育に任せるのは心配だと感じていた。一見、図24

とは矛盾した結果となった。

まとめ

本章では、アンケートに参加した子どもの父親及び母親を対象に行ったアンケートに関する設問について個別に見てきか、ここでは、回答結果全体について考察する。

まず、多くの親の日本語能力は、「話す」に留まっていた。そのためか、学校との関わりも担任との会話に比べ、配布物の理解について低い値を示した。このような場合、子どもは親と学校の間で常に翻訳・通訳を行うことになる。そして、日本語が得意でない親はそれによって子どもを高く評価するのではないかと考えられる。一方で、親は子どもの母語に関しては、その拙さや誤用に気付き指摘できるため、評価は厳しくなると言える。そして、子どもにとっても、日本語に比べて母語に厳しい評価が下されることは、日本語の方が得意だと感じる一因になると言えるだろう。

しかし、実際、子どもたちは3人に2人が国語や算数が苦手で、漢字に苦労している実態が先のアンケートで明らかとなっている。もし、親が子どもの生活言語が自分達より優秀なことをもって学校の勉強も順調だと考えているのであれば、その考えは間違っている可能性があることを知らせる機会を、どこかで設ける必要があるだろう。

一方、子どもの教育については、多くの親が学校教育の必要性を感じており、日本で進学を希望する親が6割を超えた。また、7割が日本の学校に満足とした。しかし、4割は日本の教育は心配だと答えている。加えて、日本に住み続けたいと回答しながらも、「外国の学校へ行かせたい」「子どもを帰国させたい」と回答した親がいることから、日本に住み日本社会の中で子どもを教育するとき、ムスリムとして育てたいという思いと、イスラム教の国ではない日本の教育環境との狭間で思い悩む親の存在が窺える。

なお、「外国の学校へ行かせたいか」と「日本の教育に任せるのは心配か」のクロス集計結果として、父親7人、母親8人がこの2つの設問に「はい」と回答した。つまり、父親では全体の20%、母親では24.2%が日本の学校に任せることに不安があり、できれば海外のイスラム教の国へ留学させたいと考えていると捉えることができる。

第4章 支援に向けての考察

今回の子どもアンケートでは、日本生まれ、及び6歳以前に来日した子どもは、全体の85.9%であり、多くの子どもが日本で保育園などの保育機関に通園した経験があると考えられる。さらに、得意言語について「両方」を含めて72.7%が、少なくとも、日本語が母語である子どもを含め、自分は日本語ができないとは思っていない子どもだと言える。ここから、多くの子どもが幼いころから日本語に触れて、生活言語を養い、子ども自身も日本語能力に不安を

感じていないとみることができる。しかし、一方で、教科学習では、「嫌いな教科」として国語と算数（数学）が極端に多く、漢字がすべての教科で問題となっている点や、日本語の方が得意ではあるが先生の日本語が時々わからないとする子どもの存在、また、全体の半数が「教員の問いかけや指示」と「教科書の理解」のどちらかに問題をかかえているとする結果から、子ども達は、ダブルリミテッド、あるいは学習言語の習得が不十分であるとみることができる。

また、今回のアンケート調査では、子どもの低学力に対する親の危機感をはっきりと知ることが出来なかった。しかし、子どもの母語力を「上手」と回答した親は5割弱であるのに対して、日本語力は8割強が「上手」と回答しており、さらに、7割近くの親が子どもの得意言語を「日本語」と回答しているところからも、子どもの日本語能力を高く評価していることがわかる。そして、子どもによっては、日本語能力に問題があるにもかかわらず、親が気づかず過大に評価しているケースも考えられる。そして、その要因の一つに、親の日本語能力が挙げられる。親の日本語能力は、「日本語能力」（図10）でも示したように、日本語が話せる父親・母親は80%を超えていたものの、読み書きができる親は30%～40%と減少し、漢字が読めると回答した親は父親3人、母親1人に過ぎなかった。このような状況において、時には通訳・翻訳で親を助けたり、漢字が使われた教科書で毎日勉強している子どもに対する評価の高さは、先の関係者インタビューの中の「親より生活言語に優れており、漢字の読み書きまでできる子どもに対する父親の評価は高い」とする発言とも一致している。しかし、このような親の高評価は、子どもが自らの日本語能力を過大に評価することとなり、日本語学習の妨げになるのである。

次に、親アンケートの結果だが、大半の親が日本の学校には満足しており、子どもが日本の生活に慣れて、日本人の友達と過ごすことを肯定的に捉えていると見ることができた。ところが、それでも親の約4割が「日本の教育に任せるのは心配だ」と回答しているのである。子ども達は、週1～3回（モスクによる）マドラサでアラビア語とクルアーンの学習をしている。それでも、子どもが学校教育や友人関係等、日本の生活に馴染んでいくことで、ムスリムとしてのアイデンティティに負の変化をもたらすのではないかと心配している親が一定数存在することがわかる。そのため、親にとっては日本語習得とアイデンティティの保持の両方が期待できる学習方法が理想的であるといえよう。

さらに、子ども達に目を向けると、日本語教育の中で「読む力」と「書く力」の育成のためのテキストとして、ひとつの物語を使用する場合、その物語に対する予備知識の有無は、学習の負担を大きく左右することになる。なぜなら、物語を理解するには、そこに実際には表現されていないことも推論しなくてはならず、子どもの文化的背景が異なることで、物語の内容や登場人物の心情などを理解できなかつたり全く別の考え方をすることで、学習が進まなくなる可能性が考えられるからである。よって、子どもに馴染みがある内容で、意欲や興味にあったテキストを採用することが学習効果を高めることにつながると言えるのではないだろうか。

そこで、日本語習得とアイデンティティの保持、そして、学習の負担を減らすための予備知識という点で、イスラーム文化圏の民話や、生活様式を紹介した絵本、マドラサで使用されるイスラーム学習用のワークブックなどの活用を日本語指導の際に、他の教材と併用して使用することを提案する。以下に2冊の本を使った授業の例について述べる。

1冊目、『絵本で学ぶイスラームの暮らし』は、イスラーム世界を物語形式で説明した入門書なので、あらためて物語の内容を理解する負担を軽減できる。また、主人公をそのまま自身に置き換えられるため、感情移入がしやすく、感想を述べたり、自分を主人公として物語りを創作することもできる。接続詞の正しい使い方や、文末を適切な形に変えたり話を順序立てて組み立てる練習として、一文ずつばらしたもので自然な文章を作るといった練習も無理なく取り組むことができる。

2冊目、『イスラームの学習』は、ワークブックで、お祈りの言葉を理解するために日本語が使われている。唱える言葉には、それぞれ訳と解説が日本語で書かれている。また、練習問題も日本語で解答するようになっている。このワークブックを使って、結束性・一貫性の指導として文章を要約したり、立場や視点を変えて文章を書く練習ができる。例えば、「タスマヤ」の解説は「わたしたちは、なにかをするまえに、いつもこのタスマヤをとなえます。タスマヤをとなえると、アッラーからなんでもかんたんにできるよう、たすけてもらえます。」となっている。この一文目に対して、「タスマヤ」を主語として作文させたり、二文目を「アッラー」を主語にして作文させる。また、「動詞+まえに」の練習やその応用として「動詞+とき」「動詞+から」の練習というようにレベルに合わせた文法練習を行うこともできる。また、このワークブックには、敬語が多く出てくるので、敬語の学習もできる。

もとよりイスラーム教徒は教育熱心である。預言者から伝わる有名なハディースに「知識（イルム）を求めることは男女全てのムスリムの義務である」という言葉がある。このハディースは、「知識こそがイスラームの基礎であるとのイスラームの立場を端的に表している。ここで言う知識は第一義的には宗教的知識を意味している。しかし、そのことは知識（イルム）が狭義の宗教的知識に限定されることを意味しない。イスラームの学問体系の中では全ての学問がクルアーンの解釈に奉仕するものとして知識（イルム）の地位を与えられている。」と言われている。従って、親が正しいムスリムであれば、子どもの学びには積極的に協力するはずである。だからこそ、親の懸念を払拭することが重要なのだ。親は、わが子が善きムスリム・ムスリマとして成長することを願っているならば、そのためにも学習言語を含めた子どもの学力の向上は、果たすべき課題であることを、理解すべきであるし、そして、それらが効果を発揮するかどうかは、親、特に父親の理解に委ねられるところが大きく、その点からも父親の理解と男性の支援者が必要である。家庭で父親が行うイスラーム教育の重要性は、ヤングムスリム自身が語ったものである。彼女のように日本語の学習言語能力を獲得し、ムスリマとして素直に成長しているヤングムスリムが、子ども達の羅針盤の役割を果たしてくれることを

願う。

〔注〕

- (1) 「Islamjp イスラムのホームページ」<http://islamjp.com/>（最終閲覧日2020.10.6）
- (2) マドラサとは、イスラーム世界における教育施設のこと、アラビア語で「学ぶ場所、学校」を意味する。ここでは、モスクで行われる子供向けのクルアーン（イスラーム教の聖典。コーラン）、ハディース（預言者ムハンマドの言行を記録したもの）、アラビア語を学ぶ場を指す。
- (3) イード（イード・アル＝フィトル）とは、断食明けの祝祭のこと。
- (4) パキスタン・イスラーム共和国、バングラデシュ、スリランカなどが小学一年生から進級試験がある。また、サウジアラビア王国、エジプトなどが小学六年生、中学三年生に卒業認定試験の制度がある。（外務省ホームページ「諸外国・地域の学校情報」）
- (5) ラマダンとは、イスラーム暦9月の断食月のことである。
- (6) 株式会社バンダイが「小中学生の勉強」に関する実態を探るため、小学1年生から中学3年生の子どもを持つ親（子どもと一緒に回答できる人）900人を対象に実施した「小中学生の勉強に関する意識調査」。実査期間は、2019年2月15日（金）～2月17日（日）。
株式会社バンダイ「小中学生の勉強に関する意識調査」
<https://www.bandai.co.jp/kodomo/pdf/question250.pdf>（最終閲覧日2020.10.4）
本アンケートは、「嫌いな教科」としたところを、バンダイの調査では「苦手な教科」としている。ただし、どちらの調査も対義語が「好き」となっているので同一の内容とみなした。
- (7) 株式会社バンダイが子どもの“遊び”の実態を探るため、小学1年生から中学3年生の子どもを持つ親（子どもと一緒に回答できる人）900人を対象に実施した「小中学生の“遊び”に関する意識調査」。実査期間は、2018年3月23日（金）～3月25日（日）。
株式会社バンダイ「小中学生の“遊び”に関する意識調査」
<https://www.bandai.co.jp/kodomo/pdf/question243.pdf>（最終閲覧日2020.10.4）
- (8) 学研教育総合研究所が2010年から実施しているインターネット調査をまとめたもの。小学生白書 Web 版は、日本全国の小学生（1～6年生）の子どもをもつ保護者を、約465万人のモニター母集団から抽出し、保護者付き添いのもとで、小学生本人が回答するように依頼し、1～6年生各学年で男子100人と女子100人ずつとその保護者（計1,200組）の回答が集まったところで調査を終了した。実査期間は、2020年8月26日（水）～8月31日（月）。
中学生白書 Web 版は、日本全国の中学生（1～3年生）のお子さんをもつ保護者を、約465万人のモニター母集団から抽出し、保護者付き添いのもとで、中学生本人が回答するように依頼した。中学1～3年生各学年で男子100人と女子100人ずつとその保護者（計600組）の回答が集まったところで調査を終了した。実査期間は、2020年8月26日（水）～8月31日（月）。
学研教育総合研究所・小学生白書 Web 版「小学生の日常生活・学習・新型コロナ対策の休校に関する調査」
<https://www.gakken.co.jp/kyouikusuouken/whitepaper/202008/chapter7/01.html>（最終閲覧日2021.11.14）
学研教育総合研究所・中学生白書 Web 版「中学生の日常生活・学習に関する調査」
<https://www.gakken.co.jp/kyouikusuouken/whitepaper/j202008/chapter7/01.html>（最終閲覧日2021.11.14）

〔参考文献〕

- 青山玲二郎他編著（2020）『リングフランカとしての日本語 ―多言語・多文化共生のために日本語教育を再考する―』明石書店
- 荒牧重人他編（2017）『外国人の子ども白書 ―権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から』明石書店

- 店田広文 (2019) 「世界と日本のムスリム人口 2018年」『人間科学研究』32 (2) 早稲田大学人間科学学術院 pp. 253-262
- 中野祥子他 (2015) 「在日ムスリム留学生の異文化適応に関する研究の動向」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』39巻 岡山大学大学院社会文化科学研究科 pp. 153-167
- 服部美奈 (2007) 「在日インドネシア人ムスリム児童の宗教的価値形成 一名名古屋市における自助教育活動の事例から—」『異文化コミュニケーション研究』(19) 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所 pp. 1-28
- バトラー後藤裕子 (2011) 『学習言語とは何か』三省堂
- 松井理恵 (2019) 「滞日ムスリム児童のエスノグラフィー — A 小学校における宗教的配慮への取り組みとムスリム児童の学校生活—」『国際理解教育 = International education』25日本国際理解教育学会 pp. 13-23
- 松原直美 (2020) 『絵本で学ぶイスラームの暮らし』あすなろ書房
- 南野奈津子編著 (2020) 「いっしょに考える外国人支援—関わり・つながり・協働する」明石書店
- 文部科学省 (2020a) 「『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 (平成30年度)』の結果について」
https://www.mext.go.jp/content/20200110_mxt-kyousei01-1421569_00001_02.pdf (2021.11.10閲覧)
- 文部科学省 (2020b) 「外国人の子供の就学状況等調査結果について」
https://www.mext.go.jp/content/20200326-mxt_kyousei01-000006114_02.pdf (2021.11.10閲覧)
- * ワークブック『イスラームの学習』JAN ACADEMY (著者、発行年不詳)

【付記】

本稿は、2020年度に三浦智佐美氏が提出した卒業論文「滞日ムスリムの児童生徒への最良の支援について—日本語教育を中心に—」に依拠している。

(おぎわら ひろし 日本文学科)
(みうら ちさみ 佛敎大学日本文学科卒業)
2021年11月15日受理

